

第7回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会北海道帯広大会開催

大会長 菅谷 智鶴

2017年6月、北海道帯広市で第7回全国大会を開催することになりました。全国大会の運営など全く経験のない私達でしたが、様々な方達に学び、助けて頂きながら準備を進めております。経験がない中、自分で出来ることを考え、出来ないことは人に助けてもらう、そんな当たり前のことが人の輪を広げ、お互いの結びつきを強くしていくのを実感しています。

全国大会という一つの目標に向かう仲間ができ、議論をする中で、実行委員同士に様々な化学反応が起こっています。仲間の一言に背中を押され、病気やケガで失っていた自分を取り戻すべく、または新たな自分を発見すべく様々なことに挑戦し変化している方もいます。その姿に他の委員も触発され、それぞれのチャレンジが生まれております。そんな雰囲気、プレ研修会、本大会において皆様に伝わり、気づき、学びを深め、参加される皆様が一歩前に進めるきっかけになればと願っております。

北海道の6月は、遠き山に残雪があり、大地の緑とのコントラストがとても美しい季節です。初夏の風、美味しい北海道の味覚も楽しみにぜひいらして下さい。簡単なバスツアーもご用意しておりますので、ぜひご利用ください。

実行委員一同、皆様のご参加を心からお待ちしております。

第7回
日本脳損傷者ケアリング・
コミュニティ学会
北海道帯広大会

テーマ **オベリベリの大地から発信!**
オベリベリとは...
「事故」の瞬間と終わったオベリベリは、アイヌ語で「川原にいくつにも分かれている」という意味で、私たちの思いや様々な情報が川原の奥々伝って行くことを願って、発信します!!

2017年
日 6月10日(土)・6月11日(日)
会 場 とがちプラザ レインボーホール他(JR帯広駅前)
大会長 菅谷 智鶴 (脳外療友の会コロポックル道環)
参加費 ●一般の人 2,000円
●障害のある人、および介助者 各1,000円
●学生 1,000円

主催 一般社団法人日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会
学会事務局 / 〒154-0002 東京都世田谷区下郷2-20-11小畑ビル303
TEL&FAX 03-5432-9338
後援 北海道盲学校、NPO法人日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会、NPO法人日本脳外療友の会、脳外療友の会コロポックル道環、北海道障害者福祉協会、十勝毎日福祉会

大会に関するお問い合わせ
☎090-3770-6726 担当 菅谷 智鶴 (中田アナカ 菅谷(オベリベリ))
メール obihiro.keakomi@gmail.com
ホームページ <http://caring-jp.com/>

<北海道帯広大会プレ研修会>

第7回日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会
北海道帯広大会プレ研修会

演題 **当事者セラピストだから分かること・伝えたいこと**
～高次脳機能障害の当事者から学ぶ～
経験した「当事者」の真実

講師：関 啓子氏
言語聴覚士/医学博士 神戸大学大学院保健学研究科客員教授
三歳高次脳機能障害研究所所長

日時 平成29年5月14日(日)
午後1時～午後2時30分 講演会
午後3時～午後5時 事例検討会
(当事者が抱えている問題を、本人と一緒に考えましょう)

会場 十勝リハビリテーションセンター
(帯広市稲田町基線2-1) 3階大会議室

参加費 当事者、家族、介助者、学生 各500円
一般 1000円

参加申し込みは裏面へ!

主催：日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会北海道帯広大会実行委員会
後援：北海道聴覚保健財団 / 道庁 / NPO法人日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会 / NPO法人日本脳外療友の会 / 脳外療友の会コロポックル道環
一般社団法人 日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会 <http://caring-jp.com/>
〒154-0002 東京都世田谷区下郷2-20-11 小畑ビル303

講師 関啓子さん書籍紹介

「話せない」と言えるまで

言語聴覚士を襲った高次脳機能障害, 医学書院, 2013

本書は、失語症など高次脳機能障害の専門家である著者が、心原性脳梗塞で倒れてから回復に向かうまでの自らの体験を、主治医、門下のスタッフらの協力のもとまとめたもの。発症当時から急性期病院での治療・経過、退院後の生活などが時系列でまとめられている。専門家ならではの、その知識に裏打ちされた“当事者体験”による科学的な分析を交えた筆致が注目される1冊。

<帯広の活動紹介・「真冬の車いす」>

車椅子ワークショップに参加して

(有)イフ 内藤 憲孝

ポラリス代表の水口様にお声掛け頂き二つ返事で企画段階から参加したワークショップでしたが結果的には大好評だったと自負しています。特に印象かったのはワークショップの1週間前に事例検討のために開催した「おびひろ氷まつりランチ会」で、車いす当事者の方々が自宅から会場までの移動行程を記録しながら集合し、氷まつりを皆で楽しむというものでしたが、私の知る限りではそのような試みは管内初であり、先進的な取り組みを続ける旭川地区に一步近づいた気がします。ワークショップ当日も多くの方々が長時間に渡って熱心に参加して下さい、持参した冬の便利アイテムの数々を興味津々で体験して頂くことが出来、それぞれが新たな可能性を見出したり、参加できなかった方へ繋いで頂いたりといった嬉しいお声を後日までお聞きすることが出来ました。このような有意義な時間を作って下さったポラリスの皆様には心から感謝し、また次の機会を願っております。



真冬の車椅子感想

藤井 美穂(若年性脳梗塞の会ポラリス)

今回、有限会社イフと若年性脳梗塞の会ポラリスの共同企画にて「真冬の車椅子」を企画しました。午前と午後の部に分け、10時から15時まで開催。内容は①統計から見る日本の車椅子事情②帯広市内の除排雪状況を定点観測する③冬道で車椅子ユーザー、介助者が注意すること④日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会⑤おびひろ氷祭りに行ってみた⑥スウェーデンの障害者事情。参加者は車椅子ユーザーや介護している御家族、支援者など約40名が参加されました。車椅子ユーザーを取り巻く環境は、田舎や豪雪地帯ではまだまだ整っているとは言い難い状況です。しかし、このような活動を行うことで、「車椅子でも冬に出歩いたり楽しんだりできるんだ」という当事者やご家族の活動の幅が広がり、「周囲が何をどう変えていったら良いか」と行政などが考え、「どのような支援が必要なのか」と支援者達が身近に考える良いきっかけになったと思います。

「真冬の車椅子」に参加して

北海道音更町 神田光幸

この日の集まりの前段として、実際に氷まつり会場に車椅子で出かけるのとどのような事になるのか?の検証に参加してきた。その際に露呈した一番の問題は、やはり移動手段の問題であったような気がする。会場近くの駐車場まではなんとか行けるが、そこから先が自力では困難であり、除排雪の問題や他車が車椅子用のスペースを考えずに駐車しており帰路に乗車できない等の実情があったらしい。夏季でさえ困難であろう移動手段が冬季になると更に牙をむく現実を目の当たりにした。当日には自ら福祉機器の制作している専門家から各種車椅子や福祉関連機器の紹介があり、その進化に驚ろくと共にユーザーの為に更なる革新を願う次第である。寒冷地での車椅子事情は当事者や関係者にとって本当に深刻な問題であり社会が如何に対応していくのか注視していきたいと思う。

リハ・スポーツ教室開催報告

一般社団法人輝水会/手塚由美

平成28年10月から平成29年1月まで一社)輝水会では、世田谷保健所の助成を受け、長谷川医師の声掛けによって集まった脳損傷者・高次脳機能障害・パーキンソン病等10名の障害のある参加者7名とその家族と共に週1回、全10回のリハビリテーション・スポーツ教室を開催しました。

このリハビリテーション・スポーツは、四半世紀前、ある医師が障害のある人の「完全参加と平等」の実現という国際障害者年の理想に基づき、「障害のある人が主体的に参加する中から市民交流」を訴え、平成4年開館した「障害者スポーツ文化センター横浜ラポール」で培われてきたものです。同施設の宮地秀行氏を講師に招き、既存の場を生かしたボッチャ・卓球・プールでの水中運動を行いました。発症や受傷後、障害のあることにより長年の生活の中で「あきらめ」や「どうせ〇〇できない」と、当事者も家族や介助者も諦めてしまっていたことが、このリハ・スポーツ教室の参加により、「諦めなくて良い、まだやれば出来る」と感じた事はとても大きな事です。リハ・スポーツ教室10回の参加後のアンケートによると身体面では体力がついた、介助が楽になった、精神面ではやれないと思っていたスポーツに参加でき自信がついた。また、行動面では外に出るきっかけが増えたなど全員に変化が見られました。この教室に参加した当事者はもちろん、家族・支援者・医療者も考え方に変化が起きました。リハビリのためのリハビリから本当に自分のやりたいことに向かうための自信と自主性を培う場が必要であると感じた10回でした。会場にはいつも笑いが絶えず、共通に行えるスポーツ種目によって、おのずと生まれるコミュニケーションはまさしく共生社会であると感じました。当事者に笑顔が戻ってくれば周りも明るくなることを改めて発見しました。



学会委員会活動紹介

委員会名	主な活動
研究委員会	<ul style="list-style-type: none">・「主体性についての研究」 当事者、支援者、医療関係者、学者を含めて会議を開催しています。主体性回復モデルが質的研究で確定し、現在、主体性評価票の作成を進めています。段階軸ごとの周囲の専門職の有効なかかわり方モデルを基に、今後、回復プログラムの作成や検証を進めていく予定です。・「機能評価と回復プログラム」 退院後も長期的に変化する脳損傷者のコミュニティという視点に立脚し、どのような支援プログラムが効果を生むのかについて、事例検討を軸に多職種で協議しています。現在は、事例検討と並行して、当事者に関わる多職種が情報を共有しやすく、支援方法を検討しやすい事例検討シートについても検討中です。・「TOO1について研究」 福祉用具について、利用前後の生活の変化、安全性、容易性など評価し、積極的に利用し生活の質の変化につながるよう情報提供します。
研修委員会	脳損傷者の人々が地域において主体的な暮らしの実現及びどのように改善するか等に関して、市民、専門職、当事者及び家族の知識、技術の向上を図ることを目的に研修会を開催します。
当事者社会参加推進委員会	障害者・健常者に拘らず互いに連携し、障害者の社会参加を推進するために活動を行います。委員は脳に障害を持った当事者や、医療専門職で構成されています。メンバーが学校に出向き、障害に対する理解を深めるための教育支援や、困っている当事者や家族からの相談窓口を設置します。
文化・スポーツ・芸術委員会	委員会で作るノウハウ・情報が広く市民に開かれ、必要とする人に提供できることを前提に、脳損傷者の文化・芸術・スポーツの主体的な活動の情報収集と共に、双方の活動をつなげコミュニティづくりの役割を果たしていきます。
広報委員会	学会の活動、各地域での脳損傷者に関わる活動や関連機関研修会など広報紙で紹介します。(学会ホームページで公開)

編集後記：

「障害者差別解消法」が施行され1年がたちました。マスコミや2020年東京五輪パラリンピックの障害者の「障害平等研修」が注目されています。

ところで、新聞の社説で「障害者手帳を基にした統計で障害者総数は約740万人、その内雇用されているのは30万人程度にすぎない。働けるのに雇用されず自宅で過ごさざるを得ない人は約250万人とみられている」と言っています。障害者にとってはまだまだ狭き門に変わりはないのです。私もそう思います。(菊地春夫)